令和3年度(2021年度)の曽根沼における魚介類の生息状況

田口貴史・石崎大介・岡本晴夫

1．目　的

外来魚駆除のモデル水域として選定した曽根沼（滋賀県彦根市）では、2003年度から外来魚駆除を実施しており、近年ではオオクチバス（以下、バス）の減少と在来魚介類（魚類とエビ類）の増加が顕著である。本年度も外来魚駆除を継続しつつ在来魚介類の生息状況調査を実施したのでその結果を報告する。

2．方　法

2021年度の曽根沼では、4月6、7日に電気ショッカーボートによるバス駆除を実施したほか、小型定置網（全長約15 m、目合5 mm）による在来魚介類およびバス当歳魚の生息状況調査を実施した。ショッカーボートで駆除されたバスのうち標準体長190 mm以上の個体を親魚とみなしてその数を記録した。また、定置網での調査では5～7および10月の各月中旬に網を一昼夜設置して取り上げ、捕獲魚種と各々の尾数を記録した。これら調査で得られた捕獲効率（CPUE：通電1時間または1操業あたりの捕獲尾数）を過年度と比較した。

3．結　果

バス親魚のCPUEは2019年の水準から横這い傾向であった（図1）。小型定置網でのバス当歳魚のCPUEは前年より減少し（図2）、2015年以降の低水準を維持できた。2020年には機器故障のため、ショッカーボートでの駆除を実施できなかったが、これらの結果からバスの生息状況は引き続き低位であると考えられる。一方で小型定置網での在来魚介類のCPUEと確認種数は、引き続き高位を維持しており（図3）、曽根沼は在来魚介類にとって良好な状態であると考えられる。

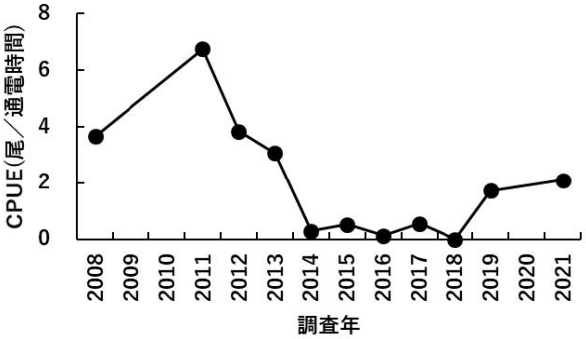

図1　電気ショッカーボートで駆除されたオオクチバス親魚のCPUEの経年変化

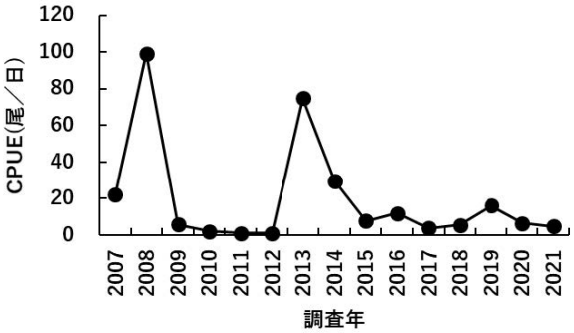

図2　小型定置網でのバス当歳魚のCPUEの経年変化

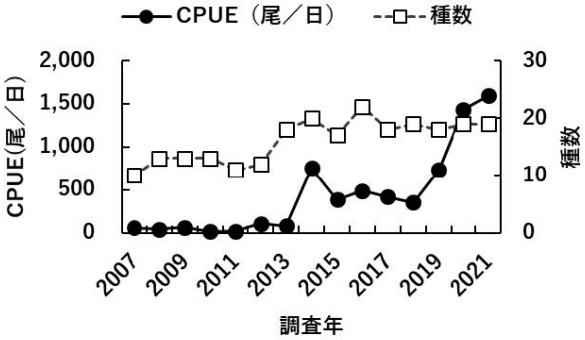

図3　小型定置網での在来魚介類のCPUEと捕獲種数の経年変化

＊本研究のうち、2020年までの調査については水産庁からの委託事業の一部として実施したものである。